

子どもの「学び」を創り出す
総合的な学習の時間の進め方

実践ハンドブック

Vol.1

基礎編

目 次

1. 総合的な学習の時間とは

- (1) 現状と課題
- (2) 総合的な学習の時間の価値

2. 実践の前に

- (1) 付けたい力を明確にしよう
- (2) 単元プランを作成しよう
- (3) 「学び」の姿をイメージしよう

3. 「学び」を創り出すポイント

- (1) 客体から主体へ
- (2) 失敗こそ「学び」のチャンス
- (3) 子どもの活動は教師の予想を超えたか
- (4) 達成感、成就感が次への意欲

1. 総合的な学習の時間とは

総合的な学習の時間が学習指導要領に位置づけられて10年が過ぎましたが、学校では必ずしも目的に即した実践が積み重ねられているとは言えない状況があります。これは、総合的な学習の時間の実践の自由度が高く、教師個々に委ねられている部分が大きいため、取り組みに差が出てくるためだと考えられます。

まずは、基本的なことを理解して、しっかりとした実践を心がけることが大切です。

(1) 現状と課題

今、総合的な学習の時間はどのように実践されているのでしょうか。例えば、次のようなことはないでしょうか。

ボイス1：総合的な学習の時間で、PCの使い方を指導しています。

ボイス2：修学旅行などの行事の準備が大変なので、その時間に使っています。

ボイス3：調べ学習をしています。模造紙にまとめるのが上手になりましたよ。

これらは、いずれも総合的な学習の時間としては望ましいものではありませんが、このような実践が行われているのも事実です。ただし、もう少し工夫すれば、もう少し理解を深めれば、価値ある実践へと変えていくことも可能なのです。

では、どうして本来の目的とは異なった実践が行われるのでしょうか。まず、その点を考えてみましょう。原因としてはいくつか考えられますが、主なものは次のような点であると思われる。

原因1：総合的な学習の時間に対する教師の理解が不足していること

原因2：他の教科のように、具体的な内容が示されていないために、何をしてもいいのか分からないこと

原因3：他の教科の実践に追われて、総合的な学習の時間の単元コーディネートの余裕がないこと

原因4：不十分な実践のために、総合的な学習の時間のよさや面白さに気づいていないこと

教科の授業時数が増え、日々教材研究に追われる中で、学校外のリソースを活用する総合的な学習の時間を充実させることは大変だと思います。しかし、だからといって「しない」「できない」とは決して言えるものではありません。現状を見つめ、課題を明らかにして、その解決のために努力することが大切なのです。

(1) 総合的な学習の時間の価値

世の中の物事は、見方を変えれば価値が180度変わることがあります。

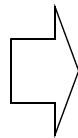
作家の山本周五郎氏の有名な作品「樅の木は残った」の主人公である仙台伊達藩の家老「原田甲斐」は、歴史上では悪人とされてきました。しかし、山本氏はこの作品の中で「自分が悪人になることで藩を取りつぶしの危機から救った自己犠牲の人」として見事に描いています。

私たちにも、その発想の転換が必要なのです。前項で取り上げた原因を逆方向から見ることで、例えば「内容が示されていないと言うことは、教師に与えられた自由度が非常に高く、自分の長所や得意なことを十分に発揮できる。」とポジティブとらえることで、総合的な学習の時間の価値をしっかりと意識できるのではないのでしょうか。

そこで、総合的な学習の時間の価値を「子どもたち」「教師」という2つの視点から考えてみたいと思います。

<子どもたちにとって>

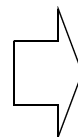
- 興味・関心のあるものに時間をかけて、じっくりと取り組むことができる。
- 失敗が許され、それが次への意欲に繋がる。
- いろいろは学び方を身につけ、それを他の教科等に生かすことができる。
- 様々な「ひと、こと、もの」とかかわることができる。



- 自分が集団や地域のために役立っていることを実感でき、自己有用感を高めることができる。
- 失敗を乗り越える経験が、主体的に学ぶ意欲を高める。
- 関わりの繰り返しが、コミュニケーション能力や豊かな心をはぐくむ。
- 自分のよさや可能性に気づく。

<教師にとって>

- 教師に与えられた自由度が非常に高く、自分の長所や得意なことを十分に発揮できる。
- 他教科との関連を図ることで、時間を有効に活用できる。
- 地域との関わりが増えることで、その後の教育活動をよりダイナミックなものにできる。



- 試行錯誤しながら学習を組み立てることによ、単元構成力（カリキュラムマネジメント）が身につく。
- 他教科等で学んだことと総合的な学習の時間で学んだことが双方向に作用し合い、子どもたちにしっかりとした学力を身につけさせることができる。
- 楽しい!!

この他にも、活動が充実してくれば、地域にとってもすばらしい価値が生まれてきます。総合的な学習の時間を充実させることは、子どもにとってもWIN、教師にとってもWIN、地域にとってもWINということになるのです。

昔から「習うより慣れる」といわれます。総合的な学習の時間は、まさにその言葉が大切な場です。まずは、先生方が失敗を恐れず、自己の常識を打ち破るような新たな活動にチャレンジしてみましょ。きっと「ワクワク、ドキドキ」が待っています。

ワンポイントアドバイス

2. 実践の前に

「習うより慣れろ」といいましたが、実践の前にはしておかなければならないことがあります。学校が教育を行う場であり、その活動には目標が定められている以上は、その達成に向けての計画が不可欠です。まずは、それをどのようにつくっていけばいいのか、どこに留意すればいいのかを考えていきましょう。

(1) 「付けたい力」を明確にしよう

学習指導要領に示された総合的な学習の時間の目標は、下記のとおりです。

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

しかし、他教科等と異なるのは、この目標を踏まえ、各学校で目標や内容を設定していかなければならないことです。示された目標が、非常に大きく概念的なものであることから、このままではどうしてよいか分からないという声にもうなずけます。

では、どこから手をつけていけばよいのでしょうか。

まずは、各学校の目標になりますが、これもかなり概念的なものになりますので、具体的な実践に直接つながるとはいえませんが、そこで重要になるのが「付けたい力」（指導要領では「育てたい資質や能力及び態度」）なのです。

<付けたい力>

学習方法に関すること、自分自身に関すること、他者や社会との関わりに関することの3つの視点から、それぞれの学年段階でそのような力を身につけさせていくかを、具体的な児童の姿で示したもの

VOL.2 参照

総合的な学習の時間における教師の自由度は高いといえども、「付けたい力」が明確にされず、それぞれが勝手に実践しては子どもたちが困ってしまいます。共通な到達点が明らかであるからこそ、そこに至までの道のりが自由に選択できるととらえるべきです。



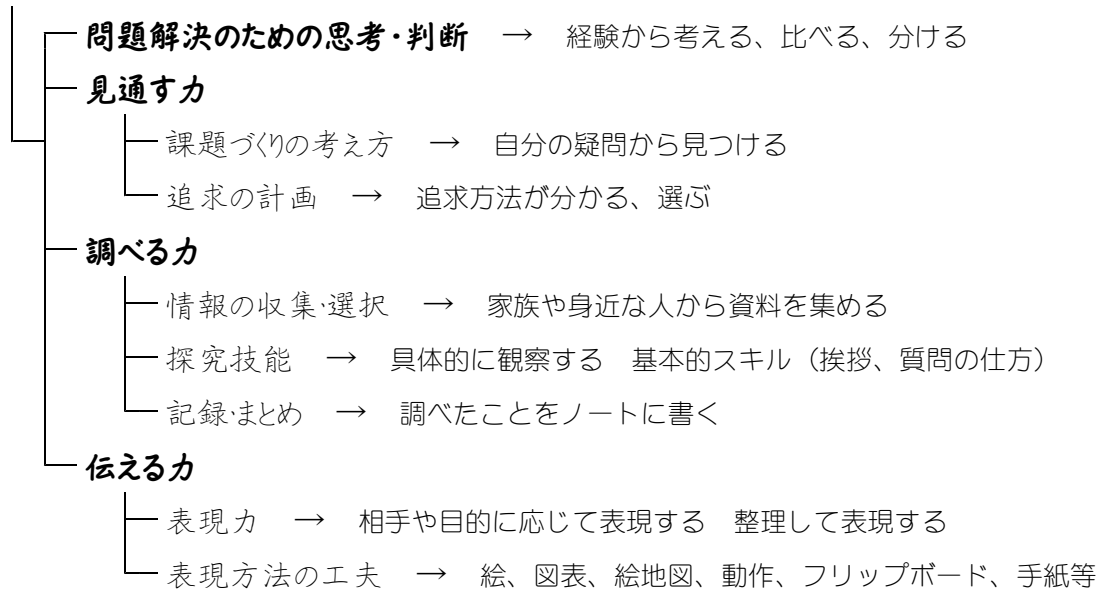
教師のにとっては、「付けたい力」を学習のどの段階で身につけさせていくのか、また、どのような手段で身につけさせていくのかが重要です。そうでなければ、いわゆる「活動あって学習なし」となってしまいます。

次に、「付けたい力」をどのように考えて、設定すればよいかを考えましょう。

まずは、最初の段階では前述した3つの視点をもとに、その内容をより具体化していきます。そして、具体化された内容ごとに、各学年でどのような力を身につけさせたいのかを考えていきます。参考までに、下の例をご覧ください。

「付けたい力」の設定手順：参考例（3年生）

①学習方法に関すること



各視点について **STEP1** → *STEP2* → **STEP3** の順番に具体化して、最終的に一覧にしていきます。

特に、STEP3に具体化する場合には、他の教科の内容等を意識することが大切です。そうすることで、学年段階にふさわしいものとなるはずです。

いずれにしても、「付けたい力」は総合的な学習の時間を進める上での「評価規準」ですので絶対に必要です。なぜなら、評価できない教育活動はないからです。しかし、この作業を最初からするとなれば大きな負担となります。そんなときは、先進校の事例を参考にしましょう。そして、実践を積み重ねながら自校の状況にあったものに少しずつ変えていくようにしましょう。

子どもたちの目的と教師の目的は異なります。子どもたちの目的は、課題を解決していくことです。しかし、教師は子どもたちに「付けたい力」をはぐくむことが目的です。教師にとって、子どもたちが取り組む課題は、教師の目的達成のための「手段」であることを意識しておきましょう。

ワンポイントアドバイス

(2) 単元プラン（活動計画）を作成しよう

「付きたい力」ができれば、次は具体的な単元プランの作成ですが、その際、次のような点がポイントとなります。

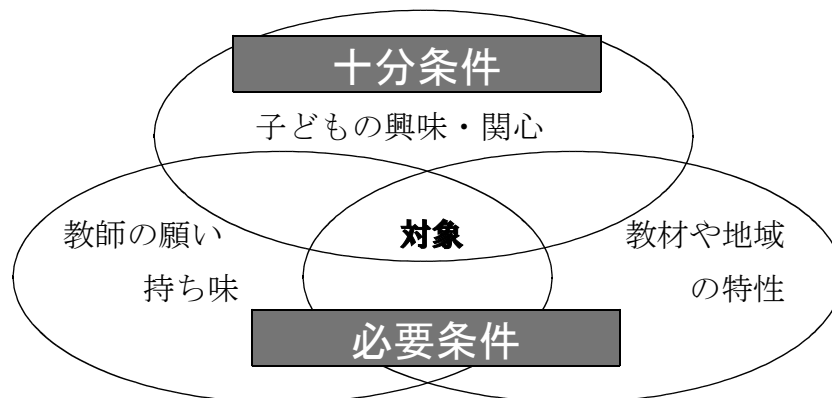
ポイント1

子ども、教師、教材や地域3つを考慮して学習対象(教材)を考える。

まず、子どもたちが興味・関心を持って主体的に関わっていける対象であるかが重要です。しかし、必ずしも初めから子どもたちが興味を示すとは限りません。ですが、教師のアプローチ次第では、対象に引き込まれていくこともあるのです。したがって、教師の願いがしっかりとあり、教師自身の持ち味を生かせる対象であることも重要になるのです。

また、総合的な学習においては、具体的な体験活動や人との関わりが不可欠ですので、教材として地域を生かすことも重要なポイントとなります。

この3点は、下のような関係でとらえると分かりやすいと思います。



ポイント2

探究的な学習プロセスを組み込む

このプロセスの各段階では留意しなければならない点がありますが、これまでの実践から下記のような点に気をつけてほしいと思います。

<課題設定の段階>

客体である子どもたちを主体にすることが求められます。なぜなら、人は刺激なしに主体とはならないからです。ですから、教師としては、学習対象にどのように出合わせていくかを考えたり、自分自身が時には役者となって演じたりするなどの工夫が求められます。いずれにしても、活動全体の成否の鍵を握る重要な段階であると理解しておきましょう。

<情報の収集の段階>

情報には「文、写真、図、表、グラフ、絵、動画、音声」など様々なものがあります。これらの中から、必要な情報を集めるために、それに応じた方法を選択することになります。その際、子どもたちの五感を働かせることに留意してください。よく、本やインターネットで情報を集めている場面を見かけますが、それだけでは感性は磨かれません。コミュニケーション能力は高まりません。見ること、聞くこと、触ること、匂うこと、味わうこと、それらを通して感じるにより、子どもたちの情報アンテナの感度を上げることが大切なのです。

<情報の整理・分析の段階>

集めた情報の中には、必要なものと不要なものが雑多にあるので、次の「まとめ・表現」に向けて整理する必要があります。また、整理した情報は、そのことから何が分かるのか等について、さらに分析していくことも求められます。その際に活躍するのが「思考ツール」です。「思考ツール」には、たくさん種類がありますし、自分たちで考案することも可能です。まずは、一度使ってみてください。上手に活用すれば、総合的な学習の時間だけでなく、他の教科等でもとて効果的な学習方法として役立ちます。

<まとめ・表現の段階>

最後は「まとめ・表現」ですが、ここで重要なことは、「相手意識・目的意識」です。だれに対して何を表現するのかが明確であれば、どのようにまとめ、それをどんな方法で伝えるかを考えやすくなるからです。模造紙にまとめたり、プレゼンソフトでまとめたりすることはよく見ますが、パネルディスカッション、ポスターセッション、ニュースやワイドショー形式、寸劇など、表現方法は多様です。いろいろな方法に挑戦してみましょう。きっと、最後には達成感・成就感を味わうことができると思います。

いずれにしても、子どもたちの活動の幅を広げ、内容を深め、価値を高めるためには、指導者自身が日頃から探究的な姿勢であること、創造的であることが大切です。

総合的な学習の時間は、他の教科のように教科書はありませんが、だからこそ、ダイナミックで楽しい教育活動を子どもたちとともに創っていける貴重な場なのです。

ポイント3

他の教科等と効果的に関連させる。

現行の学習指導要領から総合的な学習の時間は年間70時間に変わりました。授業

時数全体は増えたにもかかわらず、30～35時間減ってしまい、これまでのように十分時間をかけた取り組みができないと思うこともあるのではないのでしょうか。

そんなときは、他の教科等と効果的に関連させることを工夫してください。

たとえば、国語では「単元を貫く言語活動」の実践が求められています。その中でも、前述した「相手意識・目的意識」が重要であるといわれます。ならば、国語と総合的な学習の時間をタイアップさせた単元を考えれば、両方の目的を一つの活動で達成することも可能となるのです。もともと、国語や算数などの教科という枠をつくってきたのは大人であり、子どもにとっては、それが楽しい活動であればよいのですから。

その他にも、1つの単元の構成の仕方としていろいろな方法が考えられますので、いくつか紹介します。

① スキル重視の短期型プラン

主に、総合的な学習の時間の導入期にあたる3～4年生で効果的です。調べ方やまとめ方のスキルを付けるために、10時間程度の短時間で単元を構成します。当然、教師がある程度主導する形になりますが、何もしていない子どもたちに、これからどうしていけばよいのかを知らせ、そのための基礎的なスキルを身につけるためには効果的だと思われま

② 探究的な学習プロセスを繰り返す長期型プラン

探究的な学習プロセスを身につけるためには、何度も繰り返す必要があります。そこで、あらかじめ2～3回のプロセスの繰り返しを想定して、30～40時間の長期間で単元を構成します。これくらい時間をとれば、体験活動や実地調査などのダイナミックな活動もかなりできるようになります。

③ 複数校での合同プラン

例えば、「番匠川を九州一きれいな川に蘇らせようプロジェクト」と銘打って、上流域、中流域、下流域の3つの学校が共通のテーマをもとに、それぞれの地域の人たちと関わり、地域ならではの活動に取り組み、その情報を交流して、最後には全体で再生プランをつくって市民に提案していくなどの活動が考えられます。想像しただけで「ワクワク」してしまうのは、わたしだけでしょうか。

一人で単元プランをつくるのは難しい面もあります。いろんな人と話し、夢を語りながら、楽しく考えてみましょう。とくに、常識を越えた発想が価値ある活動を生み出します。ここは、経験より発想が大切ですので、年齢は関係ありません。

ワンポイントアドバイス

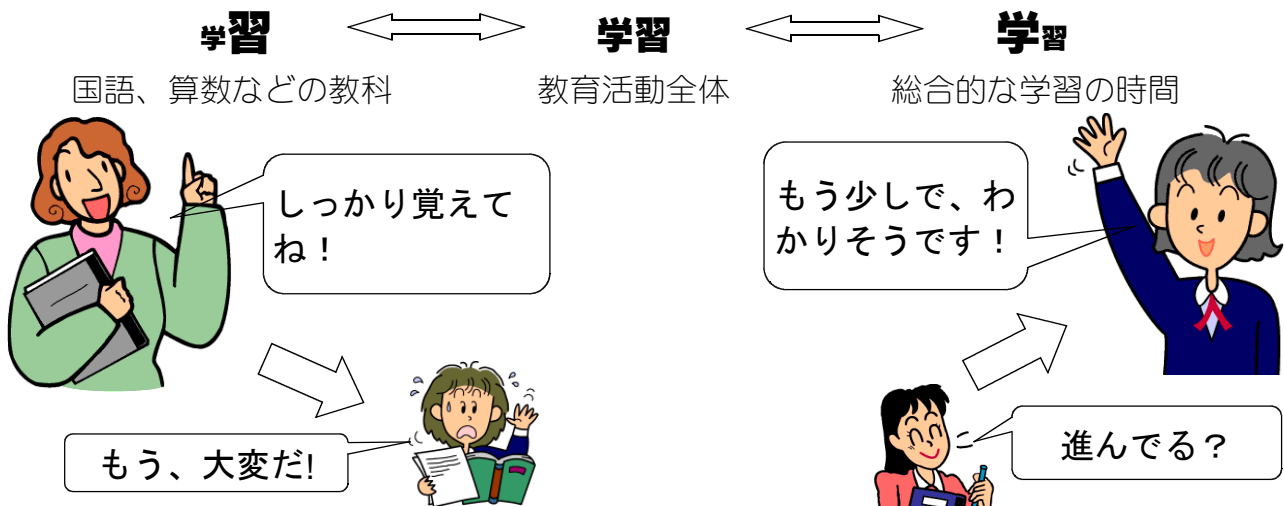
(3) 「学び」の姿をイメージしよう

突然ですが、みなさんは普段している授業で、「学」と「習」のバランスがどうなっているか意識していますか。

「学習」とは、子どもたちにとっての言葉ですから、学ぶことと習うことの両方を意味していることとなります。しかし、今の授業を見ると、「学ぶ」ことよりも「習う」ことの方が多くのように思います。これは、決して「習う」ことを否定しているわけではありません。「習う」ことがなければ、それを生かして「学ぶ」ことはできないわけですから当然必要なのですが、「習う」だけでは子どもたちはいつも受け身ということになるので、両者のバランスがとても重要になるのです。

また、どの教科においても同じバランスというわけにもいきません。国語や算数などの教科では、当然「習う」ことの方が多くなると思います。ただ、教育活動全体でそのバランスをとる必要があるので、総合的な学習の時間を「学ぶ」場としなければならぬのです。

<学習のバランスイメージ>



「学ぶ」とは、主体になっている姿です。意欲や目的を持って、何かを求めている姿です。そのような姿をつくり出すためには、学習活動の中でのより具体的な子どもたちの姿をイメージしておかなければなりません。そうしないと、どこに子どもたちにとっての「学び」があったのかを見取ることができないのです。

「学び」の姿のイメージ (例)

- 課題解決にむけて、様々な方法を考えチャレンジしている。
- 課題解決の方法が見つからず、悩んでる。
- 課題解決にむけて、互いに意見を交わし、追究の方法を考えている。
- 課題解決にむけて、自ら教師等にアドバイスを求めている。

3. 「学び」を創り出すポイント

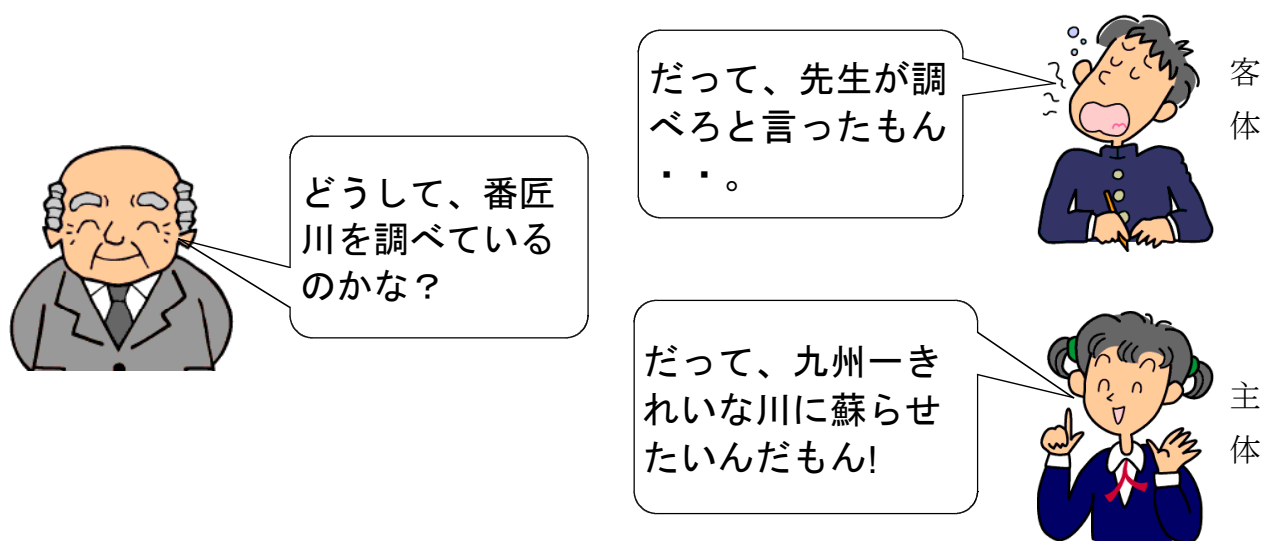
「学び」を創り出すには、どうすればよいのでしょうか。前述したように「学び」とは、子どもたちが主体となって学習活動に取り組む姿です。そのことを踏まえながら、いくつかのポイントを示してみます。

(1) 「客体」から「主体」へ

教師が提示した事象に対して客体である子どもたちを、学習活動の主体に導く過程です。そのためには、子どもたちの興味関心を踏まえながら、実態に応じたアプローチ、探求心や挑戦心を刺激するアプローチをする必要があります。課題を自分のものとして引き受けた姿を「**客体から主体へ**」の変化ととらえましょう。

イメージとしては、はじめは教師が子どもたちの前で引っ張る立ち位置から、子どもたちの後方から背中を押していく位置へと移動することになります。そのタイミングがとても重要です。

この段階が、総合的な学習の時間における教師の重要な出番であるといえます。

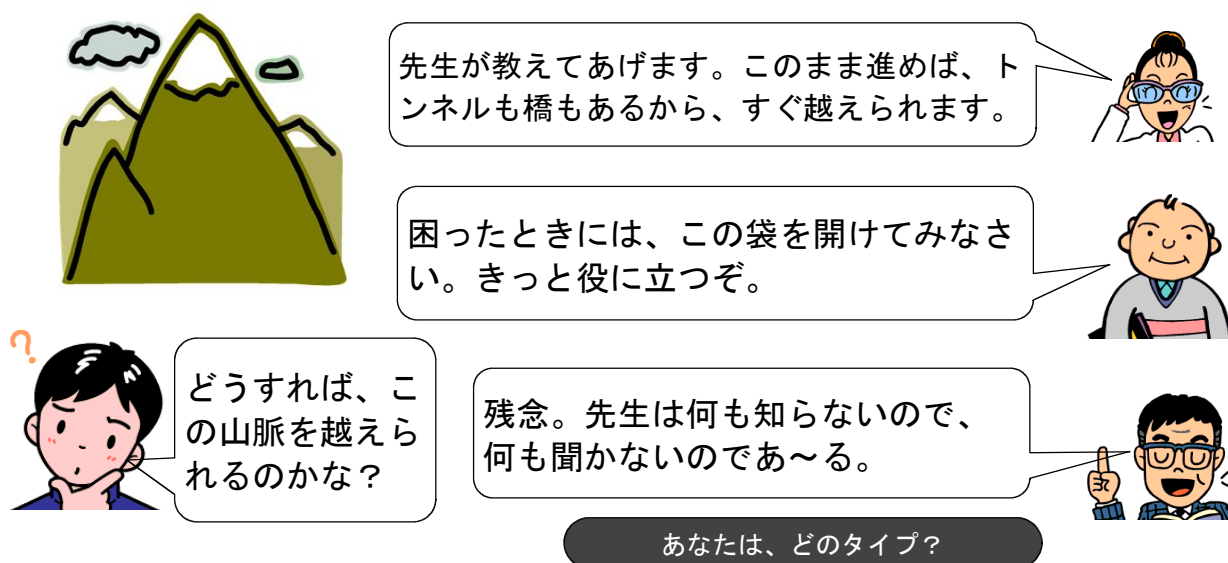


(2) 失敗こそ「学び」のチャンス

子どもたちが主体的に活動すれば、必ず失敗や躓きの場面に出合います。しかし、これこそが総合的な学習の時間において最も重要な「学び」の場となります。なぜなら、失敗や躓きの場面になって、初めて子どもたちは本気になるからです。しかし、私たちのアプローチがうまくいかないと「もうやめた」「こんなことしたってなんになる？」というような気持ちにさせてしまいます。子どもたちに「何とか成功させたい。」「今度こそ乗り越えるぞ」という意識を持たせることが、教師の重要な役割となるのです。その役割をしっかりと果たすためにも、単元を構成する段階で、失敗や躓きの場面とともに、その対応も想定しておきたいものです。

そうすれば、子どもたちはそれまでの失敗を生かし、試行錯誤しながら、新たなチャレンジを始めます。そこにこそ「学び」の場が溢れていると思います。もし、子どもたちがどうしようかと悩んでいるようであれば、「こうしてみなさい」と具体的な方向を示すことはせず、「どこから取り組めば良さそうか考えよう」など、やや抽象的なアドバイスにとどめたり、方法を示すのなら複数を同時に示し、その中のどれを選択するかは子どもたちに決めさせるようにしましょう。教師が示した方法を簡単に受け入れる子どもたちだとしたら、まだ「主体」ではなく「客体」なのですから。

きっと、失敗や躓きを乗り越えた時には、自分（たち）の力で達成できたからこそその素晴らしい笑顔が見られ、大きな歓声が聞こえてくると思います。



(3) 子どもの活動は教師の予想を超えたか

総合的な学習の時間は、活動の進行方向が定まりにくい（定めにくい）ことが特徴です。なぜなら、子どもたちが主体となって活動するので、教師のイメージ通りにはいかないからです。もし、イメージ通りになっているとしたら、それは「このままではまずい」と判断してください。

主体となった子どもたちは、教師が事前には想定しなかったような発想をして、時には教師を慌てさせるような提案をします。このような状況が生まれたときにはじめて、「やったぜ！」と喜ぶことができます。

すなわち、子どもたちが教師の予想を超えるような発想や活動をしたときに、みなさんが子どもとともに実践している学習活動が「総合的な学習の時間」としての価値を持ったと判断できるのだと思います。これは、教師主導にしないための重要な評価規準となるのです。

しかし、子どもたちがこちらの予想を超えると、教師はその後の学習の進め方に不安を抱いてしまうこともあると思います。そんなときは、「子どもとともに学んで行こう」という姿勢で、活動を楽しむ姿勢を持ち続けてください。

(4) 達成感・成就感が次への意欲

みなさんが「次も頑張るぞ！」と思うのは、どんなときですか。きっと、「やったー」という言葉が、前についていることが多いと思います。子どもたちも同じです。懸命に努力して扱ったことが何らかの形で報われたとき、認められたときの達成感や成就感があつてこそ、次への意欲が喚起されるのです。

しかし、「ただうまくいけばよい」と言うことではありません。達成感や成就感は、そこにたどり着くまでの困難の大きさに比例していきます。教師が敷いたレールを何の抵抗もなく進んだ活動では、得られる達成感や成就感も小さくなります。子どもたちが主体となること、失敗や躓きな場面を想定・設定することは、そのためにも必要なのです。

大きな達成感や成就感を味わった子どもたちの姿を目にしたら、きっと先生方も「次も頑張ろう」と強く思うはずです。